

梅ヶ畑遺跡出土銅鐸

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 京都市梅ヶ畑遺跡出土銅鐸【京都府蔵(京都文化博物館管理)】
(上段A面・下段B面。左より2号鐸、1号鐸、4号鐸、3号鐸。1号鐸の残存高29.2cm。)

はじめに 銅鐸は、弥生時代中期から後期にかけて、主に集落における共同体の祭祀で用いられた青銅製のマツリの道具です。時期や分布には粗密がありますが、九州地方から中部地方まで日本列島の広い範囲に存在し、弥生時代を

代表する青銅器の一つといえます。

出土の経緯 梅ヶ畑遺跡出土の4口の銅鐸は、京都盆地北西部に当たる京都市右京区梅ヶ畑の丘陵斜面から、1963年に宅地造成工事に伴って発見されました(写真1)。

これらの銅鐸は、1・3号鐸の

内部に、より小さな2・4号鐸がそれぞれに入れ込まれた、「入れ子」の状態になって埋納されていたと伝えられています。この埋納方法は、弥生時代を通じて広域で採用されていたようです。

銅鐸の文様と範傷 銅鐸の表面



写真2 鑄掛と補刻



写真3 補刻と飾耳の痕跡

は様々な文様で飾られています。中空の胴部にあたる「身」の部分には、様々な文様や絵画が施されます。梅ヶ畑遺跡出土銅鐸の身は、斜格子で充填された帯状の文様帯で、「田」の字状に区画されています。これらは僧侶が身に纏う「袈裟襷」に似ていることから、「袈裟襷文」と呼ばれています。また、吊り手にあたる「鈕」や板状の装飾部である「鱗」は、三角形を斜線で充填した「鋸歯文」や、渦巻を連ねる「連続渦文」、「V」字状の線を連続させる「綾杉文」で飾られています。

また、文様の突線とは別に、鑄型（範）に生じた傷を写し取った線状のふくらみである「範傷」も認められます。梅ヶ畑遺跡出土4号鐸と島根県荒神谷遺跡出土2号鐸は範傷が共通していることから、同じ鑄型で製作された兄弟の銅鐸、すなわち「同範銅鐸」であると考えられており、当時の広域な交流関係を垣間見ることができます。

銅鐸の使用法と新旧関係 器面上に残されたすり減りの痕跡から、銅鐸は鈕に紐を通して吊り下げ、身の内部に棒状の「舌」を垂らした状態で揺らすことで音を鳴

らしていたと推測されています。銅鐸の変遷に関する研究では、本来の役割であった「鳴り物」としての機能が薄れていくのと比例して大型化し、派手な装飾を持つことで視覚にうったえるようになる変化が推定されています。

この観点からいえば、4口の梅ヶ畑遺跡出土銅鐸は、吊り手の厚みやそのサイズにおいて、いずれも「鳴り物」としての実用的な機能性を持ち併せており、比較的古く位置づけられる資料で構成されたグループといえます。

製作痕跡から分かること 梅ヶ畑遺跡出土銅鐸では、様々な製作時の痕跡を観察できます。

写真2に示したのは、3号鐸A面の裾部（身の開口部付近）の状況です。パズルのように、器面に別のパーツが嵌っている状況が確認できると思います。これは、銅鐸を鑄込んだ際にガスが抜けきらずできてしまった欠孔を、銅鐸本体が冷え固まった後に溶けた銅で埋めた痕跡であり、「鑄掛」と呼ばれています。また、鑄掛の輪郭がところどころ円形に突出している箇所があります。これは、鑄掛部を本体から外れにくくする「円孔

足掛かり」と呼ばれる仕掛けです。鑄掛部のすぐ上には、鑄型によって上手く鑄出されなかった文様を、鋭利な刃物によって線刻する「補刻」が入念に施されています。

写真3に示したのは、3号鐸B面の胴部から鱗の状況です。こちらにも同様に補刻が認められますが、さらに着目したい点として「飾耳」の痕跡が挙げられます。飾耳は銅鐸の鱗や鈕に付加される装飾で、耳状に飛び出した形状を呈します。写真3では、飾耳の付け根にあたる突線のみが認められる状態です。3号鐸の完成時の姿は判然としませんが、これまでに出土した銅鐸の中には、飾耳が削り落とされているものや、逆に鑄掛や補刻により飾耳の形状が補われているものも認められます。

このように、銅鐸の細部には様々な製作の痕跡が残されており、銅鐸を製作した人々の創意工夫や、精製や量産といった製作の志向を垣間見ることができます。これらの時期や地域における違いを紐解くことで、銅鐸生産や弥生時代社会のしくみに、更に迫ることができるでしょう。

（京都大学大学院博士課程 菊池 望）